

<フォーラム報告>

グローバル社会を生き抜く力の育成に産学官がすべきこと —WACE 世界大会 in Kyoto プレ大会 討論会報告—

伊吹 勇亮¹・大西 達也²・富山 雄一郎²

本論では「WACE 世界大会 in Kyoto プレ大会」のプログラムの一つとして実施された、「グローバル社会を生き抜く力の育成に産学官がすべきこと」というテーマによる討論会での議論を報告する。コーオプ教育に造詣の深い専門家が一堂に会したこの討論会では、キャリア教育の本質、産学協働のメリットと課題、産学協働と就活のあり方について議論が展開され、キャリア教育を広義で捉えることの必要性、コーオプ教育推進の勘所としての漸進性の担保、立場を超えての協力の重要性が示された。

キーワード：産学協働教育、広義のキャリア教育、コーオプ教育、漸進性、就職活動

1. はじめに

1. 1. 本論の趣旨

本論では、平成 26 年 8 月 30 日（土）に京都産業大学むすびわざ館にて開催された「WACE 世界大会 in Kyoto プレ大会」のプログラムの一つとして実施された、「グローバル社会を生き抜く力の育成に産学官がすべきこと」というテーマによる討論会での議論を、読者諸氏に報告する。

京都産業大学では創立 50 周年記念事業の一環として、平成 27 年 8 月に「WACE 第 19 回世界大会」を開催する。WACE（世界産学連携教育協会）は産学連携教育に携わる個人・学校・企業・政府・自治体等を支援し、その展開、拡大、ブランディングを行う唯一の国際機関である。WACE 世界大会に向けた機運醸成のため、また世界大会で議論すべき内容の棚卸しをするために、世界大会一年前となる平成 26 年 8 月に京都産業大学が主催するプレ大会が開催された。

世界大会で議論する内容の棚卸しを目的の一つに掲げていることから、当日は幅広い内容でのプログラムが生まれ、特に分科会では具体的なテーマでの議論が活発に行われた。分科会での議論の前提を整理するべく行われた全体での討論が、本論で報告する討論会である。コーオプ教育に造詣の深い専門家が一堂に会したこの討論会では、日本のキャリア教育の現状についての議論に始まり、就職活動のあり方に至るまで、幅広い点で議論がなされ、多くの問題提起がなされた。これら

の論点を読者諸氏と共有することで、コーオプ教育、キャリア教育、ひいては高等教育全般に関連の深い議論を呼び起こすことができるだろうと考え、『高等教育フォーラム』誌面での報告を行うこととした。

1. 2. 討論会の実施概要

●討論会テーマ：

グローバル社会を生き抜く力の育成に産学官がすべきこと

●討論者（発言順）：

近田高志氏

（経済産業省経済産業政策局産業人材政策室室長補佐）

豊田義博氏

（リクルートワークス研究所主幹研究員）

児美川孝一郎氏

（法政大学キャリアデザイン学部教授）

荒瀬克己氏

（大谷大学文学部教授／元京都市立堀川高等学校校長）

●モデレーター：

伊吹勇亮（京都産業大学経営学部准教授）

2. プログラム内容

2. 1. キャリア教育の本質とは何か

（伊吹）

日本において現在、「キャリア教育」が強く求め

¹ 京都産業大学 経営学部、² 京都産業大学 コーオプ教育研究開発センター

られている。大学、高等専門学校、高校にとって、本来、期待されている役割との折り合いをつけながら、なおかつ今後の社会の発展に資する人材をどのように育成していくかが課題である。加えて、そこには学生や生徒一人ひとりの幸せが見出されなければいけない。そのようなキャリア教育を確立していくために、どのようなことを考えていかねばならないのか、探りたいと思う。

まず、近田氏より、経済的な意味での社会の発展に資する人材とはどういう人材なのか、お聞かせ願いたい。

(近田)

経済産業省では、「社会人基礎力」として、「前に踏み出す力」・「考え抜く力」・「チームで働く力」の三つの能力が必要と提唱している。

社会人基礎力は、職場や社会の中で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な能力をまとめたものであり、企業の方からみれば「当たり前」のものと思われるかもしれない。やや補足すると、基礎的な能力として大切であるものの、平均70点だから優秀な人材ということにはならない。人にはそれぞれ個性があり、協調性には欠けるが尖ったアイデアを出す人がいる。企業の中で新しい価値を生み出す時には、むしろそういった人材も求められるのではないかと私は考えている。

(伊吹)

人材育成のために、経済産業省や文部科学省が手を打ち、産業界や教育界もその方向性に沿う対応をしてきたが、実態としてうまくいっていない面もある。豊田氏には『就活エリートの迷走』の内容に基づき、就活のシステムがうまく機能しない理由についてお話しいただきたい。

(豊田)

第一志望の会社に入り、期待されていた人たちが、活躍できずに迷走する。そういう現象を「就活エリートの迷走」という言葉で表現し、要因について分析した結果、就職活動のあり方に大きな問題があるという結論に至った。

主なポイントとして、自己分析が巻き起こしている、学生にとって不幸のような問題がある。現在、日本で自己分析が重要視されるようになったのは、二十数年前の「エントリーシート」開発に端を発している。以来、多くの企業が「君は何がやりたいの?」「大学時代に、何を一所懸命やってきたの?」と学生に尋ねるようになり、自立的な人材を求めていこう、という大きな方向転換が起こった。しかし、本来、求めようとしていた企業のありように反し、自己分析は形骸化してしまっ

た。企業の採用方法があまりに画一的になったことも手伝って、学生は、志望企業に受かるために巧妙に自己像を作り上げるようになった。そして、就職後に、作られた自己像にこだわり、それが満たされないことから、キャリアの迷走を始めてしまう。

(伊吹)

キャリア教育がもともと目指したこととその現状について、教育機関側の話を、『キャリア教育のウソ』を執筆された児美川氏にお聞かせ願いたい。(児美川)

キャリア教育とは、中央教育審議会(以下、中教審)答申が「社会的・職業的自立」という言い方をしているように、社会的・職業的自立を支援し、促す教育だと考えている。しかし、ここ十年間の実践をみていると、学生たちを仕事の世界へ如何に渡らせるか、という部分に相当傾斜していると感じる。本来であれば、バックボーンになる人間力を身につけるところに目を向けるべきであるはずが、目先に走ってしまっている。

大学におけるキャリア教育はこの十数年間で飛躍的に拡大し、浸透したと思う。特に今では一年生から系統的・体系的にキャリア教育・支援をするようになり、単位化する科目も増えている。しかし、大学間競争で就職実績を上げる方向に傾斜してしまっている。

また、本来は正課の教育課程や専門教育と結びつき有機的に連動しなければいけなかったものが、現状はかなり外付けになっている。

(伊吹)

カリキュラムの中に、キャリア教育の要素を入れ込んだ「探求コース」という授業の枠組みをつくり、成果を上げ、有名になったのが京都市立堀川高校である。当時、校長として中心におられ、後に『奇跡と呼ばれた学校』を記された荒瀬氏から、詳しくお話しいただきたい。

(荒瀬)

キャリアの転換期には竹の「節」のようなものがあり、乗り越えなければならない壁があるべきだと捉えている。

一方で、節と節の間の「よ」の部分も大切である。これは「日常」の部分であり、例えば、どの大学へ進むかは高校生にとって大きな関心事であるが、憧れの大学に入学したことで目的は達成され、その後にはまた日常の生活が続くこととなる。その日常の中で、生き生きと生きていける、そういう若者を育てたいというのが、私たちの願いであった。教員が手取り足取り教えるのではなく、自分自身で考えて行動できる生徒を育てたい

と考えていた。

大学受験におけるモチベーションは合格そのものではなく、その後の日常の中でどういったことを自分がしたいかである。それはキャリアデザインとも関わっており、そういう力を養うことを目指した。「探究基礎」と呼んでいる取り組みは、様々なことを自分一人で行うので、何か目的を達成しようと考えたときには段取りが大切になり、その経験が受験勉強にも奏功して、大学の合格率が上がるという結果に繋がったと考えている。

2.2. 産学協働のメリットと課題

(伊吹)

荒瀬氏の言葉を借りれば、「日常の中で生き活きと生きていける学生、生徒を育てるための教育」がキャリア教育であり、その手段の一つとして、産学協働教育、すなわちコーオペ教育が存在している。ではそのキャリア教育について、産学協働で取り込むメリットはどこにあるのか。

(豊田)

様々な社会変化を念頭においた上で、その社会で求められている力を在学時から培っていくことが求められている。別の観点から言うと、現在、企業では人材育成力が失われつつあり、手を抜いているわけではないものの、かつてのOJTの力や、新人を育てる力が弱まっている。

しかし、そういった力を教育機関だけで涵養できるかという点、恐らく難しく、もっと広い現場や働く場に身を投じて、様々な経験をするのが、必要ではないか。授業料を支払い教育を受ける学生は消費者であるが、社会に出て働くことで生産者という立場に変化する。実際、生産者としての自覚を促す社会に身を置く経験をする方が、学習のスピードが数倍速く、得られる成果も大きい。そういう意味で、産業界が門戸を開くことが必要であり、教育機関としては、産の開放した働く場を活用することに大きなメリットがある。そこに、産学協働の意味があると捉えている。

(伊吹)

教育機関から見た場合、産学協働のコーオペ教育に、高校・高専・大学等で取り組んでいく時、どのようなハードルがあると児美川氏はお考えか。

(児美川)

産学協働の教育を進めようとする際、ハードルは三つあると考えている。

一点目は「就活」である。就職と連動させてしまうことから、産学が協働しようとしても、そのこと自体が変質していく部分があるので、就活と

常に結びつくような産学協働の現状を考え直す必要がある。

二点目は産学協働教育による学びは必須でありつつも、教育機関側には時間的に余裕がある教員がたくさんいるわけでもなく、ノウハウも十分にあるわけではないことから、産学協働の教育システムを推進していくためには、コーディネーター機能の強化が必要だと考えている。

三点目は大学が如何に教育機関としての主体性を発揮できるかが重要である。キャリア教育を大学全体の教育課程の中に有機的に連関するよう明確に位置付けることが必要である。

(伊吹)

荒瀬氏は中教審の委員も務められ、様々な議論の経緯、あるいは高校教育の現場での経験から、産学がうまく連携していくための課題について、どのようにお考えか。

(荒瀬)

中教審の議論を通じて感じたのは、産、学、官それぞれに、またそれぞれの中でも、思惑が異なっていることである。官にしても、中教審の「キャリア教育・職業教育特別部会」は文部科学省と経済産業省、一部厚生労働省も参画したものの、三つの省が一緒に関わるのはきわめて異例なことで、これが“きわめて異例”である間は、議論は進展しないのではないか。

一人の若者が、社会全体の成熟や進展に資する人材になるとともに、その若者が幸福に生きていくことを考える時に、様々な立場の人たちが、各々の立場の考えを持ち寄り、総合的に考えていくことは重要である。しかし、立場に固執し、あるいは立場を守ることに執着してはならない。各々が「Not My Business」と考えてしまう。そういう発想では、いつまでも、キャリア教育を進めることは難しく、その辺りに課題があると考えている。

2.3. 産学協働と就活のあり方

(伊吹)

産学協働を考える中で、就活のあり方がポイントだという話が挙げられたが、近田氏は「就活」が今後どのようになり、そのときに産学の協働はどう進んでいくと思われるか。

(近田)

日本における「就活」は、新卒一括採用が定着しており人生において大きな「節目」となっている。現在の就活を取り巻く課題は日本の社会全体のシステム的な問題でもあることから、産学官が立場を超えて、システムとしてどうしていくかを、議論する必要があると考えている。

(伊吹)

豊田氏は『就活エリート迷路』の中で、就活はこうすべきという提言をされているが、理想の「就活システム」を前提にして、教育といった観点から、産学の協働をどのようにしていけばよいとお考えか。

(豊田)

企業は大学生に社会人基礎力を身につけて欲しいと思っているものの、今の就活システムは、それを期待することができない。例えば、時期の規制がかかれば企業は、如何に前倒しをして、早めに優秀な人材に対してスクリーニングをかけようか、と考える。それでは、本来的な産学協働教育の価値とは異なる方向に向いてしまう。

また、この時期の規制がある限り、企業は今の新卒採用システムを絶対に辞めることはない。この規制を無くし、採用の仕方そのものを柔軟にすることと同時に、この産学協働の取組みを新卒採用と切り離しながら、大きな視野の中では同じものとして捉えながら育てていく、という社会全体の合意が必要だと考える。

(伊吹)

児美川氏は同じような論点を、どのようにお考えか。

(児美川)

「就活」については、豊田氏が言われたことに賛成である。無理に時期を規制するのではなく、もう少し異なる形が必要ではないか。大学生に即していえば、1年生から卒業までの間に、様々な形で企業と接触して、色々な経験をし、その中に産学協働の教育プログラムも存在し、そこが最終的に就職にも繋がるのが良いことである。

全員がこれまでの新卒採用システムに乗る時代はもう過ぎ去っているのではないか。そうすると産学協働で教育の中身を作っていくという必要性が高まるであろう。

(伊吹)

児美川氏の話のポイントは「漸進性」である。荒瀬氏は「漸進性」が大切という話について、堀川高校のカリキュラムは、段階を踏んで生徒たちを導く枠組みになっているとのことであるが、どのような工夫をされていたのかお教えいただきたい。

(荒瀬)

「探究基礎」と呼ぶ取り組みでは最初に、やり方を徹底的に教え込むことからスタートし、その後、実際に学んだやり方でもってやってみるという体験の場を用意した。その体験を経た上で、「じゃあ、自分でやっごらん」という段階に進むとい

う、三つの段階を実践してきた。

この時に、生徒一人ひとりが、何ができるようになったかが、重要である。これまでの教員による一方通行の授業から、生徒が、何ができるようになったかを考えるような教育が必要であり、わからない物事に対して何とか工夫してそこにアプローチしていこうとする力や自分で考える姿勢を初等・中等教育で養わなければいけない。自分で考える姿勢が養われていない状態では、インターシッパや就活をどうしようかといった話ではないか。わからないものに対して真摯に迫っていく、自分で考える、そういう姿勢を育てることが重要ではないか。

2.4. 討論会のまとめ

(伊吹)

この討論会では、たくさんの課題を出していただいたが、ポイントは、二つあげられる。一つ目は、キャリア教育は、広い意味で捉えないといけないということ。二つ目は、その広義のキャリア教育を進めていく上で、産学協働の教育、日本版のコーオプ教育を進めていく必要があるが、それにあたって、企業、教育機関、行政が、各々解決すべき課題があるということ。三者がボーダーを越えて、「Not My Business」と言わずに、解決しなければいけない問題も含めて、考えていく必要がある。

最後に、登壇者に一言ずつお願いしたい。

(近田)

荒瀬氏から、最後に「わからない物事に、工夫してアプローチしようとする力、自分で考える姿勢を養うことが大切」という話があったように、わからないことがたくさんあることを喜びとする、そういう姿勢が大切だと感じた。

(豊田)

日本の若者の約8割が、大学の後期に進路を決めているが、これ程遅い国は日本以外に無い。早く決めれば良いということではないものの、現状を打破する必要がある、まさにこの産学協働によって提供される教育の場は、何らかの形でその学生の職業に対する主体的な意識や態度を育むきっかけになるはずである。

(児美川)

この十年、日本の教育機関はキャリア教育に取り組んできたが、日本の子どもたち、若者たちは、ますます依存的になっているのではないか。丁寧に取り組むことで、言われたことだけやっておけばいい、というふうになっているのではないか。産学協働は重要であるが、自ら考えて、行動でき

る子どもたちをどう育てるか、そのベースが必要であると考えている。

(荒瀬)

「獅子はわが子を千仞の谷に突き落とす」と言われるが、見境なく、わが子を千仞の谷に突き落とすだろうか。ある程度の年齢になった時に、その子を見極めて、この谷なら、あるいはこの子なら、いまここで突き落とすことができる、と考えるはずである。私たちは結果的に、若者を育てることの大切さがわからなくなり、マニュアルに頼ってしまっている。この点を再考する必要があるのではないか。

3. まとめ

討論会で提起された論点は、まとめると、三つの点に集約できると考えられる。

一つ目は、キャリア教育はその他のカリキュラムとの有機的連関を含め（専門科目の中でキャリア教育がなされることも大いにありうる）広く考えられてしかるべきであり、PBLやインターシップといった産学協働型の日本型コーオペ教育はその一手段に過ぎないという点である。

二つ目は、コーオペ教育を推進していく際には、その勘所として漸進性を担保することが肝要であるという点である。そして、漸進性の担保のためには、専門的なコーディネーターを育成することと、専門科目との接続を考えることが求められる。

三つ目は、特に就活のありようを考える際に、如何に立場を超えて協力することができるかが、日本におけるコーオペ教育、キャリア教育、さらには高等教育全般の高度化には不可欠であるという点である。

これらの点は、もちろん、平成27年8月に開催されるWACE世界大会で議論されることとなる。しかし、それにとどまらず、本報告を読んだ関係者がこの点について考え、そしてなにかしらの行動をすることで、世界がよりよい方向に進むきっかけとなれば、筆者としては望外の喜びである。むしろ、筆者もその一員として、今後も努力していきたい。

謝辞

討論会当日は素晴らしい議論を展開いただき、また本論の掲載を快く許可くださった討論者の皆様方に、心からの御礼を申し上げます。

参考文献

- 荒瀬克己 (2007) 奇跡と呼ばれた学校－国公立大学合格者30倍のひみつ. 朝日新聞社
 児美川孝一郎 (2013) キャリア教育のウソ. 筑摩書房
 豊田義博 (2010) 就活エリート of 迷走. 筑摩書房

What should be done by Industries, Schools, and Governments? : Report of the Panel Discussion in WACE World Conference Pre-Event in Kyoto

Yusuke IBUKI¹,
 Tatsuya ONISHI², Yuichiro TOMIYAMA²

This article reports the discussion on coop education held in WACE World Conference Pre-Event in Kyoto. Professionals of coop education spoke in this panel discussion, and topics below were discussed: nature of career education, merits and challenges of industries-schools collaboration, desirable collaboration in relation to job-hunting, and so on. Conclusions of the discussion are: necessity of grabbing career education in wide sense, assurance of progressiveness in coop education, and importance of collaboration beyond the positions.

KEYWORDS: Industries-Schools Collaboration, Career Education in Wide Sense, Coop Education, Progressiveness, Job-Hunting

2015年2月23日受理

¹ Faculty of Business Administration, Kyoto Sangyo University

² Center of Research & Development for Cooperative Education, Kyoto Sangyo University

